

# インタビューを通しての地域的偉人の評伝研究

杉野 ふき

## 0. はじめに

この研究は、地域の社会活動を行った人を対象として行った。そして、評伝とは、評論を交えた伝記ということなので、まず、伝記を書くことを考えた。さらに、インタビューを行うことについては、他者にインタビューをし、他者によって評価された内容が、対象者が地域的偉人ということ、分析をするための、偉人であるかどうかの判断材料にできると考えたからである。よって、ここでは、1949年に児童養護施設加茂愛育園を創立した、山田周（やまだいたる）を対象者とした。

## 1. 知識人とは

初期の知識社会学者であるマンハイムは、知識、つまり思考や意識、文化などの精神現象のすべてと社会の構造は関連があるとして、特定の社会集団の成員は、同様の知識を持っているとした。そして、成員は無意識にその知識に拘束されているということを確認した。その一方で、その知識をあやつることが現代の課題であるという立場をとる。そのために、支配されている人々は無意識に、現状を隠されていることに気づかない。その現状を隠す観念をイデオロギーとよんだ。そのイデオロギーでは、相手が持っている知識だけでなく、相手が思考すると思われる体系も含んでおり、自己に対して、イデオロギーの様な見方を使用し、すべての思想をそれぞれの社会的位置としてとらえ、知識と社会についての関連が妥当であるかについて、判断をする。そのために、知識社会学は全体的・普遍的・評価的イデオロギー観念であるということになる。

以上のことを参考に、自分なりに知識人の条件を定義する。

知識人とは、

1. 人々が持つ世界観の概念や構造、枠組みなどを、その外側から見、考えることができる。
2. 他人の社会における位置はもちろん、自身の社会における位置というものも把握できる。
3. 社会全体の思想や意識、社会における存在の妥当性について判断を下すことができる。

という、3つのことがいえるのではないだろうか。まとめると、知識人とは、知識社会的イデオロギーを持っているために、人や物事の利害や関心から離れて見る事が可能となるから、結果、社会を正しく見る事ができるのである。そして、知識人は、偉人となりえるのではないだろうか。

このことを、山田周に当てはめると、アメリカ人捕虜収容所のキャンプの司令官だった

とき、ほかの日本人<sup>(1)</sup>とは違う人道的な振る舞いをしている。さらに、食べるものも、身につけるものもままならない戦後の動乱期に、当時の社会で必要だったものである、児童養護施設、虚弱児施設などを建てた。しかし、当てはまらないこともある。例えば、知識人の2の定義でいうならば、周は医者になっていたのではないだろうか。以下の章では、周の経歴をたどり、その分析をしていく。

## 2. 山田周の経歴

### 2-1 山田周の略歴<sup>(2)</sup>

- ・ 1907(M40)年8月25日生まれ
- ・ 1920(T9)年 尽誠中学 入学
- ・ 1927(S2)年4月 関西大学専門部文科 入学。同年12月 中退
- ・ 1930(S5)年4月 東京市昭和鉄道学校高等部 入学
- ・ 1931(S6)年3月 東京市昭和鉄道学校高等部 卒業
- ・ 1932(S7)年3月 前妻と結婚
- ・ 1932(S7)年3月 長女出生
- ・ 1937(S12)年4月 前妻と離婚
- ・ 1937(S12)年7月以降 支那事変(日中戦争)に応召
- ・ 1938(S13)年4月 満州国 新京特別市 日本学校の指導員となる
- ・ 1938(S13)年5月 次女出生
- ・ 1938(S13)年5月 後妻と再婚
- ・ 1939(S14)年6月 三女出生
- ・ 1941(S16)年12月以降 大東亜戦争(太平洋戦争)に応召、中国、東南アジア諸国に転戦
- ・ 1944(S19)年9月 父、死去
- ・ 1946(S21)年4月 日本に帰還する
- ・ 1946(S21)年12月～1948年 授産事業として、阿波竹材工業有限会社設立(11月25日成立)、および社長に就任
- ・ 1947(S22)秋 遺墨『自由』
- ・ 1948(S23)年12月 母、死去
- ・ 1949(S24)年～1952(S27)年 加茂児童愛育協会、養護施設加茂愛育園を創立。理事長、園長に就任
- ・ 1951(S26)年秋 遺墨『神は愛なり』
- ・ 1952(S27)年～1955(S30)年 社会福祉法人愛泉会が認可  
愛泉会理事長に就任
- ・ 1955(S30)年9月 大阪市に転出  
世界連邦建設同盟大阪支部 常任理事に就任
- ・ 1955(S30)年～1963(S38)年 社会福祉法人愛泉会 会長に就任

- ・ 1956 (S31)年4月 日生乳業株式会社、経理部長就任
- ・ 1962 (S37)年6月 日生乳業株式会社、退社
- ・ 1963 (S38)年4月 帰郷
- ・ 1964 (S39)年6月 愛泉会 理事長に復職
- ・ 1966 (S42)年10月以降 『Kura!』の作者と再会
- ・ 1989 (H1)年12月5日 胃ガンのため死去、82歳

## 2-2 出生から学生時代 (1907年~1931年)

山田周は、1907 (明治40)年8月25日に、徳島県三好郡加茂村 (当時) にて山田家の長男として生まれた。

当時山田家は、代々医者の家業としており、9代目に当たる父親も、眼科医として営んでいた。昔は、町村部に医者が少なかったために、休みであろうと夜中であろうと、往診を頼まれると何回でも行かざるを得なかった。そして、そのとき同時に、母親は父親が往診を頼まれるたびに、たとえ体調が悪くて寝ていても、起きて、往診の準備をしなければならなかった。そのような家庭の中で育った周は、休みもなく、夜もなく往診に出かける父親と、それにつかえる母親を見て、父親は、仕事であるので当然のこととしても、母親がつらそうに準備を手伝う姿が、子供の頃からかわいそうだと思っていた。そして、医者になって欲しいという父親の願いとは反対に、“医者”という職業は、家族に苦しみを巻き込む職業であるものとし、将来絶対になりたくなかったのである。そのために周は、そのことを行動であらわしている。

医者になるには、学がないとなれない<sup>(3)</sup>ので、小学校を卒業すると中学校を受験するというのは必須のことであった。その中学校を受験するときに、周は地元の中学校を受けることになっていた。しかし、試験日当日、仮病を使って試験に行かなかった。仮に試験を受けて受かってしまったら、親の決めたとおりの道を進むことになる。だから、仮病を使って、医者になること、親の決めたことに反抗しているのである。とはいうものの、12歳の子供が、自分の進む道を自分で切り開いていくことは、かなり難しいことである。それで、父親から試験を受けなかったことについて怒られるのを逃れるためにも、結果的には、隣の尽誠中学校に行ったのである。

その後、尽誠中学を卒業し、故郷徳島を離れ、関西大学専門部文科に入学している。しかし、わずか8ヶ月で中途退学をしている。その理由は、自分はどこかの大学の医学部に入学したと偽って、報告し、両親に送金を頼んでいた。しかし、大学には入っているが医学部ではないことがばれてしまって、大学には入れないということになって、中退ということになってしまったのである。

それから上京して、東京市昭和鉄道学校高等部へ入学し、卒業している。

周は、仮病を使って中学校の入学試験を受けなかったり、うそをついて親元を離れて暮らしたりして、父親が願っていた医者になるという道を自ら崩していったのであった。これらには、小さい頃から母親の苦勞している姿を見て育ち、家長、つまり父親のいうことには絶対従わなければならないという、当時では当たり前の慣習と、封建的な性格を持つ

父親に反抗していたことがあらわれている。

### 2-3 最初の結婚・離婚（1931年～1937年）

東京市昭和鉄道学校高等部を卒業し、1年後に前妻と結婚している。そして、長女について長男をもうけている。その長男がまだ赤ん坊の頃、家族を連れて徳島へと帰郷しているのである。それは結婚を報告するためだったのであろうか、それとも医者になることが不可能になったからであろうか。

しかし、親は前妻との結婚を認めなかった。伝統のある山田家にとって、家とつり合わない前妻の存在には反対するのみであった。そのために、前妻は子供2人を残して、一方的に出て行かざるを得なかったのである。おそらく、親はすでに結婚相手を決めていたのだろう。そして、前妻と協議離婚し、前妻は徳島を離れたのである。その前妻も、自分の夫の家にこれ以上の混乱をもたらしてはいけないと思ったのだろうか、それきり音信不通のままである。

そして、周は長男を妹の養子としてだしている<sup>(4)</sup>。これについても、親が非常に反対しているのであるが、そのことに背いている。

### 2-4 戦争時代と再婚（1937年～1946年）

周は前妻と離婚して、すぐに親の決めた相手と結婚生活を始めている。以前から、親の決めたことには反抗するといった行動をとっていた周であるが、この時は自分自身というよりも、田舎の人の目、つまり、親に反抗してはいけないのではないかという意見に妥協して、仕方なく結婚したのであった。

やがて、支那事変が起こり、中国の上海へ応召された。そして翌年の4月に、植民地であった満州国に新京特別市日本学校の教師として行く。満州国では、1935年に日本語を国語とし、学校の職員や学生の生活において、もちろん家庭生活においても日本語の使用を励行した。さらに、1938年から実施された新学制のもとでは、「日本語ハ日満一徳一心ノ精神ニ基キ国語ノトシテ重視」と学制要項にかかれている。満州でも、台湾と同じように皇民化政策、つまり、住民を天皇の統治する国、日本の人民とすることの一環として、皇民化教育がなされていたのだろう<sup>(5)</sup>。そこで、周は、日本語教育にたずさわっていたそうである。そして二女と三女が生まれている。続いて、満州にいるときに太平洋戦争が起こり、応召されるのである。

太平洋戦争では、日本の陸軍の一員として、同時いた満州国にとどまらず、台湾、東南アジア地域を転々としている。そのとき、アメリカ人捕虜のいるキャンプの司令官をしていた時期があった。そのキャンプにいた捕虜の一人が、戦後に『Kura!』という戦争時のことを書いた本を発行しており、その中に、“山田”の名前がでてくる。その部分を紹介する<sup>(6)</sup>。

Ⅲ ブランチの日本人の中で、彼らが助けることができたことよりも、仕事の義務の中で多くの侮辱行為や苦痛を捕虜に与えずに、立派に振る舞った日本人がいた。いくつかの場合において、彼らは、捕虜の苦しみをできるだけ緩和しようとした。彼らの少数は、仲間の命令のもとに生じる苦しみにおいて、個人的な憎悪を蓄積せず、復讐しなかった。

人間らしく、礼儀正しいと判明した人々のうちの 1 人は、山田中尉、Beketaung キャンプの司令官だった。一般には厳しかったけれども、彼は正しかった。彼は彼自身の良心に従って行動した。残酷で、下品で、古めかしい数百人の東洋人のうちで、山田は有能で、礼儀正しい役人として優れていた。彼は命じられた仕事では、どこでも可能な限り、侮辱行為および危害を加えることを避けながら行動した。

Lumiere [1966:123-124]

この本の中での、周の行動は、当時の捕虜にとって、印象深いものだったと思われる。戦争中の 1944 年に勲五等瑞宝章を授与されている<sup>(7)</sup>。そして、周が日本へ帰ったのは、1946 年 4 月であった。最終的な階級は、陸軍大尉だった。

## 2-5 戦後、そして児童養護施設の創立（1946年～1955年）

徳島に帰ってきて、周は、阿波竹材工業有限会社を自宅内の敷地に設立し、社長に就任している。そして、業務の目的として、1. 竹材の各種処理、並びに竹材工芸品の製作、加工、販売と、2. 戦争罹災者に対する職業補導、および授産などをあげている。しかし、わずか 2 年で会社はなくなっている<sup>(8)</sup>。

周が次に行ったことは、前の会社と同様に、自宅のある土地に、児童福祉法に基づく養護施設として、加茂愛育園を創立し、初代園長となったことである。この養護施設を建設するために、代々山田家が守ってきた土地をほとんど売り払い、それを資金として建てている。このために、9代続いた由緒ある医者の家をこわすこととなり、親戚とは絶縁されてしまったのである。それでも、後悔をしなかったのは、“祖先が作ってきた財産は、自分が努力して作ったものではないので、社会に還元しても祖先は許してくれるだろう”という自分流の哲学を持っていたからだと考えられる。しかし、ここで父親がまだ存在していたならば、再び反対を受けることになっただろう。さらに加茂愛育園の創立と同時に、経営主体として、加茂児童愛育協会も創立し、理事長となっている。園長はそれから 7 年間、理事長は 4 年間務めている。経営主体は、途中、加茂児童愛育協会から、社会福祉法人愛泉会に改め、理事長となっている。周は、加茂愛育園の園長の時に、ほかにも、社会福祉法人愛泉会の理事長として、虚弱児施設加茂博愛園の設立に貢献し、後妻の弟が初代園長となっている。さらに、母子寮の必要性を感じ、三加茂町と協力して町立三加茂町母子寮の設立にも貢献している。このように、3つの施設の設立にたずさわっているが、加茂愛育園は、戦後、戦災孤児、ひきあげ孤児の街頭浮浪が問題となり、浮浪児対策として建てられ、そして、児童の健康という点から、児童福祉法の内容が改正されて、母子家庭の児童、および、重度心身障害児の福祉の増進を目的として、加茂博愛園と、三加茂町母

子寮が建てられているが、周の考えには、戦争体験から、多くの戦争孤児をまのあたりにし、戦争での一番の弱者は子供だということが思いがあってのことだろう。さらに、日本へ帰ってから多くの浮浪児を見て、加茂愛育園を始め、その愛育園で児童を預かることによって浮き彫りとなってきた、食糧不足による栄養失調などの園児にたいして博愛園を、戦争によってできてしまった母子家庭を保護するために、三加茂母子寮を必要としたのである。こう考えると、すべてのものが戦争へとつながっていているのがわかるだろう。

周が愛育園の園長だった7年間、施設の子どもたちに関しては、家族同然の扱いをしていたようである。例えば、男の児童とは一緒に風呂に入ったり、休日には川や海に連れていったり、児童の遊びの中に入って遊んだり、本当の父親と同じだったと、当時の入所者は語っている。しかし、その反面、周自身の子供には、あまり相手にしていなかったのである。自分の子供よりも、施設の子供の方がかわいいと思っていたようである。周の子供に言わせると周は、「家庭的にはもうゼロ、父親としては。もう、家族のことは振り向か何だなあ、もう、ほったらかしっていうか。(中略) 家族はそっちのけで施設のことばかり。施設の子供をかわいがるっていうかなあ、何もかも。」という父親だったそうである<sup>(9)</sup>。そのほか、同じ養護施設の会合に出かけて、自分がよいと思ったものや、新しいこと、珍しいものを取り入れるのが好きだったようで、東北の方にある、同じ名前の愛育園の歌をそのまま取り入れたり、レコードプレーヤーで遊戯の時の音楽を流したり、ラジオ体操を毎朝行ったり、クリスマス会にはサンタクロースの衣装を着たり、いろいろなことをしていたようである<sup>(10)</sup>。さらに、愛育園の園長、愛泉会の理事長という職に就きながら、加茂教育委員会の委員長などの仕事にもたずさわっていた。愛育園も、定員を70人に増やし、もっとも児童数が多い時期であった。

## 2-6 大阪時代(1955年~1963年)

そのころ愛育園は定員がいっぱいの状態がつづき、戦争の浮浪児だった児童も15歳になり、愛育園をでて、就職する児童が増え始めた頃、周は愛育園の園長と愛泉会の理事長の職を退き、愛泉会の会長として大阪市に行っている。当時、中学校卒業した者が就職する場所は、徳島県内にはほとんどなかった。そのために、多くの卒園者、そのときは約40人が京阪神地域へと就職している。周は、その就職する職場を指導するために行ったのである。そして、養護施設出身者の事務所を開設し、卒園者の世話役を担当していた。

周が大阪にいたのはおよそ8年間であったが、そのあいだに、世界連邦建設同盟の活動に関心を持ち、世界連邦建設同盟大阪支部の常任理事に就任している<sup>(11)(12)</sup>。昭和30年代は、関西や四国に世界連邦建設同盟の会員が増大した時期であった。そのときの思いを書いたものを一部紹介する<sup>(13)</sup>。

賀川豊彦氏、湯川秀樹氏等々と共に世界平和の為献身。再び戦争のない世界と、戦災孤児の出来ない様、努力を重ねる。私財を投じて大東亜戦[争の]終戦に伴う戦災孤児の救済を思い立った宿命的な関連から、二度とそうした悲劇の生じないことを願って、平和運動に身を投じた次第。

※ [ ] 内は、筆者が付け足した部分

この文中の、賀川豊彦は1948年から世界連邦会議に出席し、副会長に選ばれている。湯川秀樹は1961年に世界連邦世界協会の5代目の会長となっている。その後も2人は、世界連邦の活動をしている。特に賀川豊彦は、同郷である徳島県にゆかりのある人である。このことと、世界連邦に興味を持ったことは、無関係ではないだろう。

## 2-7 再び愛泉会理事長へと、奇跡的な再会（1963年～1989年）

周は大阪へ行って8年たってから、再び徳島へ帰郷し、社会福祉法人愛泉会の理事長に復職している。

帰郷してからは、三加茂町青少年育成協議会委員や三加茂町社会福祉協議会の理事。そして、もっと地域の大きい徳島県の社会福祉協議会の理事、徳島県養護施設協議会の会長、全国養護施設協議会の広報副部長など、たくさんの活動にたずさわっている。それらの功績を掲げて、勲四等への叙勲の話が浮上してきたことがあったのだが、もっと全国規模の活動をしていなければならないということで、その話は流れている。

そして、2-4に書いている『Kura!』の作者であり、当時捕虜であった、C. L. Lumiere氏が、周に会うために、アメリカから日本に訪れた。これは、日本の某テレビ局の方がアメリカに旅行をしていたとき、『Kura!』を読んで、本の中ででてるアメリカの捕虜だった人たちと、日本の軍人だった人たちをテレビ番組で対面させようということで、作者に同意をもらって、2人で日本に来たということだった。しかし、周にとっては急な話であったことと、番組の説明が十分でなかったということで、番組の実現はしなかったが、この作者とは対面して、再会を喜びあったそうである。この『Kura!』のなかに、作者が日本へ来る途中、ホンコンで書いたメッセージのようなものがかかっている。これがその訳である。

多くのほかの人々[日本の軍人]がそう[周のよう]ではなかったとき[戦時中に、捕虜として捕らえられていたとき]に、親切で、思いやりのあったマイベストフレンドである、山田周に。

私たちは、再びあなたに会いたいと思っています。

強く、思っています。

Cornel Lumiere

ホンコン 1996年10月

※筆者が訳し、[ ]内は付け足した部分

このメッセージを読んだだけで、戦争時の周の行動のすばらしさ、というものが伝わってくるはずである。20年以上前の記憶である、“山田周”という名前を覚えられていたのだから。

ほかにも、愛育園で小さい頃から15歳まで育って、精神薄弱者更生施設に行った子供

を、周は自分の養子にすると言っていたことがあったそうだが、家族の大反対にあい、あきらめたようだ。この時は、付き添いなしでは日常生活をすることが難しいその子を「わしが面倒見てやらんと誰が見るんな」といって、周りの人を困らせたのである。また、周は、Tさんに、「男っていうのは社会の中で、思う存分力を出して仕事をしろ」という言葉と「女性はそれ（夫）を支える格好で、男のために尽くせ」という言葉を言っている。この後の方の言葉は、周の今までの行動と矛盾している。しかしながら、これは、結局、周の父親の行っていたことと同じだったのではないだろうか。

そんな周も、1989年12月5日に病死するのであるが、その葬式は、三加茂町始まって以来の大きいものだったという。参列者が860人、花輪が96あったということから、周がいかに多くの人と関わりを持った生き方をしてきたかということが、わかるだろう。

### 3. 分析

#### 3-1 遺墨、遺訓<sup>(14)</sup>の意味について

##### 3-1-1 昭和22年秋“自由” 十代 周

この時期は、戦争が終わり、日本に戻ってきて1年過ぎた頃である。このときには、阿波竹材工業有限会社の社長になっている。しかし、その会社の状況がわかるものが入手できていないので、ここでは触れないでおく。この時、何事も不自由なことが多かったと思われる戦争から、解放された、自由になったという気持ちのあらわれではないだろうか。

“自由”ということが、自分にとっても社会にとっても非常に重要なことであるという、1つの考え方ではないだろうか。また、これを書く3年前に、それまで自分のことを幾度か束縛してきた父親が亡くなっている。それゆえ、よりいっそう自分の自由を獲得したということも含むのではないだろうか。

##### 3-1-2 昭和26年秋“神は愛なり” 十代周

これは、1949年に児童福祉施設加茂愛育園を創立した、2年後の年である。施設の運営、子どもたちの扱いに関しても慣れてきた時期であろう。さて、この施設を建てた頃に、協力してくれた2人の日本人のクリスチャンがいる。その協力してくれた方々の影響を受けて、“神”という言葉が遺墨の中にはめ、自分も神の使いとしてみたのだろう。そして、“愛なり”という言葉は、当時、ほとんど両親のいない戦争孤児を預かっていたので、それら、施設の子どもたちに向けて、愛を与えるということの重要性を示しているのではないだろうか。つまり、自分を神の使いであると考えたと、神は、愛を与えるのだということだろう。

##### 1-3 無一物中無尽蔵花有月有楼台有 十代 周

(むいちぶつのなかに、むじんそうのはなあり、つきあり、ろうだいあり)



これが書かれた時期は不明ではあるが、晩年の頃と言われている。これは、あたかも、41年の月日を費やしてきた施設の、建てる時から、書いた当時までの周の人生をあらわしているようである。まずは“無一物”であるが、これは、施設を建てるための資金にするために、自分の家の土地をほとんど売ってしまった。これが何も持っていない状態の“無一物”である。次の“無尽蔵花有月有楼台有”というのは、住むことのできる家さえあれば、取っても取っても尽きないくらい多くの、花や月といった美しいものがあるといっている。この“楼台”は、施設を指し、“花”や“月”は施設の子供をさしているのではないだろうか。又は、すばらしいものたとえをしているのではないだろうか。

これらのことをつなげると、お金も土地も、何も持っていなくても、住む家さえあればすばらしいものが生まれてくることをあらわしている。これを、周の人生に置き換えると、お金なんてなくても社会に貢献していれば、お金では買うことのできない、たくさんのすばらしいものを持つことができる、それは自分ができたのだ、ということを行っているのではないだろうか。

### 3-2 養護施設の建設と世界連邦建設同盟の関連

3-1-2でも触れているように、施設を建てるにあたって、キリスト教のクリスチャンの方が協力してくれている。そのこともあってか、施設が始まってから、長い間にわたり、地元のSさんという宣教師の方が、毎週日曜日に施設を訪問し、日曜学校を開いている。このことはFさんとKさん、Mさんがインタビューの中で語っており、聖書の話の聞いたり、賛美歌を歌ったりしていたそうである。

そして、世界連邦建設同盟では、2-6にかいてある、賀川豊彦氏と、湯川秀樹氏の両人は、キリスト教を信仰している。そして、世界連邦建設運動は宗教界にも広がり、基督者、日本仏教徒、神道の3つの宗教の分野で、協議会が結成され、現在もその活動は続いている。

さらに、周が施設を建てる時の心情として、戦災孤児を救済するためという思いがあった。そして、世界連邦建設同盟でも、戦争で、愛する家族を失うなど、このような多くの悲しみを繰り返すことのない、恒久平和の世界を作ろうということも、目標の一つとしてあげられている。

以上によって、養護施設を建てたことと、世界連邦建設同盟の活動に関心を持ったことには、キリスト教と世界平和を軸とした、2つのことが理由となってつながっていたといえるだろう。

## 4. 結論

山田周の評伝を書くことによって、戦時中の捕虜についての扱いや、戦後の動乱期に、児童養護施設などを創立したことなどは、先に挙げた地域人の定義に当てはまるだろう。それらの行動より、地域の人が、周を偉人として見るようになったのだろう。それは、知

識人だったからこそなり得たものだろう。そして、分析により、周のとったさまざまな行動は、何らかの形でつながりを持っていることがわかった。しかし、周が田舎で生まれ育ったために、明治・大正・昭和の3つの時代で起こった、さまざまな出来事、戦争や当時の文化のために、できなかつたこともあつただろう。それでも、周のことを調べるにしたがつて、波瀾万丈な人生を送りはしているが、時代を広い目で見ている、すばらしい人であつたということがいえるだろう。

#### 注

- (1) 『Kura!』の xiii ページ、4段落目参照。
- (2) 山田周の略歴は、本人の書いた履歴書などをもとにしている。
- (3) 旧制中学は、どちらかといえば、旧制高校や専門学校へ進学するために、基礎的な勉強をするところであつたと同時に、立身出世の入り口にも位置していたといわれる。
- (4) いつの出来事かは調査できていない。
- (5) 詳しくは『日本通史 第19巻』347～362ページを参照せよ。
- (6) 原文は英語なので、筆者が日本語に訳したが、不明なところは訳さずに書いた。
- (7) 本人の勲記によって確認済み。
- (8) 阿波竹材工業有限公司に関する、当時のことについての資料が不足なため、ここでは深く触れないでおく。
- (9) 詳しくは、卒論（杉野，1999）の参考資料にある、Mさんのインタビュー記録を参考。
- (10) 詳しくは、卒論（杉野，1999）の参考資料にある、F、K、Nさんのインタビュー記録を参考。
- (11) 世界連邦建設同盟大阪支部常任理事だつたという確認はできていない。
- (12) 日本での世界連邦建設同盟は1948年に広島被爆3周年を記念して結成された世界連邦というのは、国家の壁を取り除いて、世界を1つの政府で1つの統一した法律をつくり、統治することを目指している。
- (13) 山田周の履歴書の、社会事業経験年数の項に書かれていたものである。
- (14) 遺墨とは、山田家の家訓とか、家系図など、歴代の家長がいろいろなものを書いて、墨で書いて残したもので、遺訓とは、子孫に残す言葉や教えである。

#### 参考文献

- 文藝春秋（編） 1994 『完本・太平洋戦争』，文藝春秋。
- Lumiere, Cornel 1966 Kura! , JACARANDA PRESS PTY.LTD.
- 江口 圭一 ほか 1995 『岩波講座 日本通史 第18、19、20、21巻』，岩波書店。
- 福祉士養成講座編集委員会（編） 1992 『改訂社会福祉士養成講座④ 児童福祉論』，中央法規出版。

- 花村 春樹・北川 清一（編） 1994 『児童福祉施設と実践方法——養護原理の研究課題——』, 中央法規出版。
- 猪木 正道 1995 『評伝吉田茂①』, 筑摩書房。  
 ————— 1995 『評伝吉田茂②』, 筑摩書房。
- 井上 俊ほか（編） 1996 『ライフコースの社会学』, 岩波書店。
- ハイメ カスタニエダ・長島 正（編） 1989 『ライフサイクルと人間の意識』, 金子書房。
- 児童家庭局（編） 1991 『改訂・児童福祉法 ——母子及び寡婦福祉法・母子保健法・精神薄弱者福祉法——の解説』, 時事通信社。
- 児童擁護研究会（編） 1994 『養護施設と子どもたち』, 朱鷺書房。
- 櫻田 美雄（編） 1998 『ラジオスタジオの相互行為分析——平成9年度社会調査実習報告書——（第2版）』: 95-157, 徳島大学総合科学部 人間社会学科 国際社会文化研究コース 現代国際社会分野 「社会調査実習」関係者一同。
- 加藤 周一・ライシュ.M・リフトン.R.J = 1977 矢島翠訳, 『日本人の死生観(上)』, 岩波書店。
- 川村 皓章 1983 『勲章みちしるべ——栄光のすべて——』, 青雲書院。
- Langness, L. L. & Frank, Gelya 1981 Lives : an anthropological to biography. =1993 米山 俊直・小林 多寿子訳, 『ライフヒストリー研究入門』, ミネルヴァ書房。
- Lewis, Oscar 1961 The Children of Sanchez : Autobiography of Mexican Family. , = 1969 柴田 稔彦・行方 昭夫訳, 『サンチェスの子供たち——メキシコ家族の自伝——』, みすず書房。
- 毎日シリーズ出版編集株式会社（編） 1976 『勲章』, 毎日新聞社。
- 松平 弘明 1998 『後藤田政晴——行革に半生をかけた男——』, 随想舎。
- 三加茂町史編集委員会（編） 1973 『三加茂町史』, 三加茂町: 968-991。
- 三好 昭一郎・松本 博・佐藤 正志 1992 『徳島県の百年』, 山川出版社: 215-236。
- 森岡 清美・青井 和夫（編著） 1980 『ライフコースと世代——現代家族論再考——』, 垣内出版株式会社。
- 森 武麿 1993 『日本の歴史⑳ アジア・太平洋戦争』, 集英社。
- 中山 慎吾 1993 「社会福祉実践とイメージ（Ⅰ）——糸賀一雄の福祉実践イメージに関する社会学的考察」, 『社会学ジャーナル』 第18号: 78-118, 筑波大学社会学研究室。  
 ————— 1994 「社会福祉実践とイメージ（Ⅱ）——糸賀一雄の福祉実践イメージに関する社会学的考察」, 『社会学ジャーナル』 第19号: 100-132, 筑波大学社会学研究室。
- 中野 卓・桜井 厚（編） 1995 『ライフヒストリーの社会学』, 弘文堂。
- 小野寺 百合子 1990 『私の明治・大正・昭和——戦争と平和の八十年——』, 共同通信社。

- 三枝 和子 1998 『岡本かの子』, 新典社。
- 堺 正一郎 (監修) 1969 『徳島人物事典』, 新聞四国ニュース刊: 261。
- 佐藤 郁哉 1992 『フィールドワーク——書を持って街へ出よう——』, 新曜社。
- 世界連邦建設同盟 1996 『世界連邦の手引』, 世界連邦建設同盟。
- 杉野 ふき 1999 『インタビューを通しての地域的偉人の評伝研究』 徳島大学総合  
科学部卒業論文 (徳島大学社会学第一資料室)
- 鈴木 範久 1984 『内村鑑三』, 岩波書店。
- 鈴木 依子 1996 『社会福祉のあゆみ——日本編——』, 一橋出版。
- 社団法人 徳島同友会 (編) 1968 『郷土史に輝く人々 第一集』, 社団法人徳島  
同友会: 9-47。
- 田畑 茂二郎 1984 「世界連邦主義者としての湯川先生」, 桑原 武夫・井上 健  
・小沢 通二 (編) 『湯川秀樹』: 176-180, 日本放送出版協  
会。
- 谷 富雄 1996 『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』, 世界思想社。
- 徳島福祉生活部 (編) 1993 『徳島県社会福祉施設名簿』,
- 徳島新聞社調査事業局 (編) 1981 『徳島県百科事典』, 徳島新聞社: 912。
- Webb, Sidney & Webb, Beatrice 1932 Methods of Social Study, =1982 川喜多  
喬訳, 『社会調査の方法』, 東京大学出版会。
- 横山 春一 1959 『賀川豊彦伝』, 警醒社。
- 養護施設協議会 (編) 1986 『養護施設の40年——原点と方向をさぐる——』,  
全国社会福祉協議会。
- 1990 『養護施設ハンドブック』, 全国社会福祉協議会。
- 全国養護問題研究会 (編) 1992 『春の歌うたえば——養護施設からの旅立ち——』,  
ミネルヴァ書房。